

グローバル化された世界における トランスナショナリズムの潮流

浅川 公紀

(武蔵野大学政治経済学部教授)

一 問題の所在

ナショナリズムは国際政治における最も重要な要因の一つである。政治的アイデンティティの中で、最も重要なのがナショナリズムである。ナショナリズムは、どのネーション・ステート（国民国家）に政治的忠誠心を持つかを決定する。哲学的にも歴史的起源からみても、ナショナリズムが実用的なパワーであったことは、多くの学者が一致しているところである¹。ナショナリズムには考えられうる多大な影響力がある。伝統的な世界政治の重要な特徴である。

しかし現在では、ナショナリズムは過去に比べて支配的な政治的アイデンティティではなくなってきており、様々なトランスナショナルな要因が代わりに強まってきており、その意味で世界は分岐点にある。とりわけ

ローバル化が所与とされる現代国際政治の視点はナショナリズムから脱ナショナリズム、すなわちトランスナショナリズムへと軸足が移りつつあるといわれる。

トランスナショナリズムは、人間の思考と世界的な相互交流を通じて発展してきた。トランスナショナリズムは、国家、国境を越えて人間を結びつける忠誠心、活動、その他様々な現象を含んでいる。

トランスナショナリズムという概念は、国境を超越する勢力を意味する。トランスナショナルな問題は、世界中の様々な国の人々に影響を与えるイデオロギー、組織、思考システムから発生する。遡って古代ギリシャのストア哲学は、一民族、あるいは一政治グループの構成員というよりはむしろ人類の一員としての人々に訴えたが、今日のトランスナショナリズムは、宗教、哲学、イデオロギー、トランスナショナルなコミュニケーション、フェミニズム、文明の衝突等、様々な形で現れている。²⁾

二 グローバリゼーションの世界

我々の殆どは、ナショナリズムと自分のネーション（民族）およびステート（国家）に対する中心的な政治的忠誠心のメッセージをしっかりと受け入れる気持ちを持っている。この政治的志向性は非常に馴染み深いもので、殆どの人々にとって代替を想像することも難しい。しかし、そういう代替は存在し、ここ数十年にますます力を得ている。人的交流と政治的アイデンティフィケーションは伝統的国境を越えて動いており、無数の地域的、世界的繋がりを生み出している。グローバリゼーションが世界におけるトランスナショナリズムを普及させてきた。

グローバルゼーションは単に、社会間の相互連結性が強まり世界のある一部の出来事が遠く離れた国々の人々や社会に次第に大きな影響を与えていく過程をさす。グローバル化された世界とは、政治的、経済的、文化的、社会的出来事がますます相互に連結し、そうした出来事が大きな影響力をもつ世界である。言い換えれば、社会は他の社会の出来事にますます多方面で、ますます大きな影響を受けることになる。⁽³⁾

グローバルゼーションは、ますます進む経済、通信、文化の国境を越えた統合を意味する。それは、殆どは、商品、金、人、情報、アイデアが長い距離を移動するスピードを急速に増大させてきた技術的変化の結果である。歴史における重要な技術的進歩の約九〇%が一八〇〇年以降に起こった。その間、発見と発明の頻度が加速している。インターネットであれ、ジェット機による旅行であれ、その他の進歩であれ、この技術革新の多くが、幾世紀にわたり支配してきた国家志向を弱め、グローバルな繋がりを拡大させる方向に世界を動かしている。

まず知っておかなければならないのは、グローバルゼーションはすべてを含む言葉で、国の衰退から国特有の文化の終焉、情報化社会の出現にいたるまで、ありとあらゆる展開を表現するのに使うことができる。しかし、多くの人々がグローバルゼーションという言葉を口にするが、その言葉が実際何を意味するのかを正確に定義できる人はそうはいないだろう。これはグローバルゼーションを肯定的にとらえる人と、否定的にとらえる人がいることが一因である。⁽⁴⁾

実際、グローバルゼーションは様々に定義されてきた。

- 1 何マイルも離れた場所で起こった出来事によって局地的な出来事が起こる、またその逆が起こること
ど、離れた地域を結ぶ社会関係が世界中で密になること⁽⁵⁾

2 世界経済の統合⁽⁶⁾

3 脱領土化あるいは人々の間における超領土関係の成長⁽⁷⁾

4 時間と場所の圧縮⁽⁸⁾

トランスナショナルリズムは、人々および民間組織の国境を越えた社会的、経済的、政治的繋がりを意味する。それはグローバル化に先駆けて存在し、またグローバル化により加速してきた。グローバル化はプロセスであり状態であるのに対して、トランスナショナルリズムは態度であり、幅広い国境を越えた政治的アイデンティティ、交流を含む。トランスナショナルリズムは現代になって急速に成長しており、グローバル化と合わさって世界政治に「広範かつ革命的变化」を生み出している。⁽⁹⁾

輸送と通信のグローバル化と経済と文化のグローバル化により、世界はますます相互依存性、相互の繋がりを強めてきた。このグローバル化がトランスナショナルリズムに拍車をかけてきた。近代の輸送手段は少し前には想像できなかった量とスピードで、人と製品を国境を越えて運搬している。船舶はその大きさと数量において急速に規模が大きくなっており、国際的輸送コストを低減している。僅か一世紀半の間に、通信は劇的な進歩をとげ、電報から始まって、写真、ラジオ、出来事を録画する能力、電話、複写、テレビ、衛星通信、ファックス、そして携帯電話、コンピュータによるインターネットのコンタクト、ワールドワイドウェブ、電子メール、ビデオ会議を通しての情報と進歩してきた。一九八五年には米国から他の国に四億二五〇〇回の電話がかけられたが、二〇〇二年にはそれが五九億回に増えた。またCNN、アルジャジールなどの衛星テレビ放送が世界のニュースを世界の殆どの地域、国に放送するようになった。通信革命は、想像できる殆どあらゆる主張を掲げる多数のトランスナショナルなグループの形成と成長を助長した。

こうしたグループは国連などの国際機関を通して国際的にも、国内的にも重要な影響を与えるようになって

いる。また通信革命の結果、「民主的国際主義」が助長され、民主化の波が国際的に拡大されるようになった。すなわち、トランスナショナルな通信により異なる国々の市民が相互に影響しあい、意見を交換し、政治活動を組織し、政治行動に乗り出すことができるようになった。¹⁰⁾一九八〇年代末から九〇年代初めにかけての東欧、旧ソ連の民主化、現在進行中の中東での民主化運動の拡大はその例である。

また輸送、通信の世界化は経済の国際的相互依存を強め、貿易、海外投資を拡大させ、経済的グローバル化を加速してきた。ドル、セントという額において貿易が拡大する以上に、世界的経済交流は、互いと互いの製品に慣れ親しむことにより、人々をトランスナショナルに結び付けてきた。ある調査によると、日本人にアジア諸国と欧米諸国のどちらにより親密感を覚えるかと尋ねた際、回答者の五四%が「欧米諸国」と答えた。また、なぜ欧米諸国に一体感をもつのかとの問いに対しては、八九%が「経済的相互作用」のためと答えている。¹¹⁾

また輸送と通信の発達は人々の国際的交流の頻度を増し、文化の差を縮め、文化的統合を促進し、グローバルな市民社会の形成に寄与する。ビッグマック、ジーンズ、ロック・ミュージック、映画、アイポッドなどに代表される世界共通の大衆文化が生み出されている。トランスナショナルな市民社会が発達すれば、地域的、あるいはグローバルな統治の仕組みが形成され、領土的な国家を補足し、あるいはそれに置き換わることが考えられる。この世界共通文化は多くが米国、西欧を源泉としているが、これは欧米の経済的、政治的力を反映している。これは必ずしも欧米の文化的優位性を意味しない。文化のグローバル化、文化の輸入に対しては、人々の七五%が好意的に受け止めている半面、七五%は伝統的文化を弱めるものと考えている。

三 トランスナショナルリズムの系譜

トランスナショナルリズムの源泉はこうしたグローバルゼーションによるばかりでなく、古くは人間の思想からも出発している。トランスナショナルリズム思想の系譜は、西洋文化においては古代ギリシャ、ローマのストア派、東洋文化においては仏教にまで遡る。

トランスナショナルリズムは、アクションとアイデンティフィケーションという両方の要素を持っている。アクションの次元では、トランスナショナルリズムは、共通の目的を完遂するために、個人やプライベートなグループといった集団として、人々が国境を越えて協力するプロセスである。別の次元では、トランスナショナルリズムは、政治的アイデンティティの源泉としてナショナルリズムに代わる代替を提供する。この概念は、我々が個人として、民主主義、共産主義などイデオロギー、キリスト教、イスラム教など宗教、エスニックあるいは性別など人口動態的特長、欧州連合（EU）など地域、その他認識される共通の絆として認識する繋がりを指す。

ただ、殆どの人は予測しうる将来にわたってナショナルリズムを放棄することはないだろう。また物事は変化しつつあり、一部の人々は自分の政治的アイデンティティを一部あるいは全部、ナショナルリズム的アイデンティティから他のアイデンティティに変化させていることを観察することも重要である。トランスナショナルリズムそれ自体は、本来、平和を実現する力でもなければ、対立を引き起こす力でもない。国際関係へのアプローチには、リアリズム、リベラリズムなどがあるが、リベラルは紛争的な国家中心のシステムから協調的な相互依存システムへの移行が進行中であり、また望ましいと主張する。これに対して、グローバルゼーションは破

壊的であると考えてそれに反対する反グローバルバリゼーション運動も起こっている。

トランスナショナリズム思想は、長い間、ナショナリズムに支配されてきた政府思想の周辺で存在してきたが、二〇世紀に徐々に再浮上し、現代のポストモダンニズム、構成主義、フェミニズムという三つの現代トランスナショナリズム思想の多くの側面に具現化している。とりわけ重要なのは、ポストモダンニズム、構成主義、フェミニズムの三つである。これらのアプローチをとるアナリストは、リアリズムとリベラリズムは現代の国際システムを永続させるための小道に過ぎないとし、あるアナリストは、リアリズムとリベラリズムも何ら「国際関係に平和を保証する」ものではない、と主張している。^{①②}

これら三つの代替アプローチの各々は、我々が創り出すものだけが唯一の真実だというアイデアから出発する。各アプローチは、動かせない真実のように見えるものに挑戦し、我々の現実を再想像し、それを作り直すことを奨励する。これらの国家に関する見方としては、ポストモダンニズムは、国家が必要なものでも不可避なものでもない。諸国家は、政治を律するための目的と管理の特権的中心として自らを確立したものであると見ている。構成主義は、国家は社会的構成物である。国家のアイデンティティと利益は国家間の相互作用の中で生まれてくると見る。フェミニズムは、国家の利益とアイデンティティは父権的構造を反映しているとする。変化に関しては、ポストモダンニズムは、重要な政治活動が、我々の考え方、あり方、行動の仕方に対して国家が押し付けた制限に抵抗し打破することであると見る。構成主義は、人間が構造を作ったのだから、人間が規則やその実践を変化させることにより構造を変化させることができるとする。フェミニズムは、変化は、性別に関する偏見と国家の性別による性格を調べることによってのみ可能だと見ている。

トランスナショナルな協力がもたらす明確な利益に関しての論争は、一九六〇年代から七〇年代に、とりわ

けアメリカにおいて新学派を生み出した。この議論は、単なる貿易による相互利益にとどまらず、主権国家の優越性を脅かし始めていたその他のトランスナショナルなアクターも論じている。この新学派はしばしば多元主義と言及されるが、その多元論者によると、ウェストフアリア国家システム確立以降の三〇〇年間、世界政治は国家が独占してきたが、世界政治はもはや国家の独占アリアナではない。この理論の代表的人物であるロバート・コヘインとジョセフ・ナイの共著によると、特定の政策を政治的に働きかける利益集団、国境を越えた様々な活動に見られるトランスナショナルな協力、インターナショナルな非政府組織（NGOs）などの政府以外のアクターの重要性を考慮しなければならない、と論じている。⁽¹⁵⁾

こうした国際関係をイメージすると、多様な相互作用チャンネルを通して様々なアクターが結びついた蜘蛛の巣のようなものである。トランスナショナル現象が国際関係セオリーの語彙に追加されたことは重要であるが、セオリー概念としてはまだ発展途上にある。⁽¹⁶⁾

四 トランスナショナルリズムの行動と展開

近年、トランスナショナルリズムが前進していることは、トランスナショナルな非政府組織（NGO）の数と活動範囲が急速に拡大していることに如実に現れている。NGOの一般的な意味は非政府組織であり、市民社会組織と同じである。これらは、国境を越えて活動し、民間の個人から構成され、いかなる政府にも従属しない組織である。NGOの定義の範疇に入る他の種類のトランスナショナル組織はテロリスト・グループや多国籍企業である。NGOの数は一九〇〇年から二〇〇二年までの一〇〇年間に、六九から一万以上に増えた。

一九七五年以降、グローバルゼーションの急速な進展とともに、NGOの数も最も急激に増えた。このうち、国連の協議機関としての位置付けをもつNGOは、一九五二年には二二二だったが、一九九二年に九二八、現在は二〇〇〇以上になっている。

基本的には、NGOはその目的を推進するために単独で、あるいは協調して機能する一種の利権団体である。NGOには、オランダに本部を置く環境保護団体フレンズ・オブ・デイ・アース（FOE）（インターナショナル）のような六七カ国に加盟団体をもち二〇の関連組織を持つて提携しているような団体もある。NGOの国連その他の国際機関の国際会議への参加もますます増加しており、その活動はより活発になっている。NGOは国際政治における正当なアクターとして認知されてきており、扱っている多様な課題を情報普及、請願活動などにより政治の中心舞台に押し上げる役割を果たしている。またトランスナショナルNGOとその各国支部は、各国政府に対して行動を起こす政治的圧力を加えている。

地域的トランスナショナリズムはこれまでのところ欧州でだけ具現化しているが、これによりネーション・ステートよりも地域を政治的アイデンティティとする傾向が増大することになりうる。EUの域内住民の八人に一人が、伝統的な国家のアイデンティフィケーションから欧州地域というアイデンティフィケーションに移行し、EU住民の六〇%がEUに対してある程度のアイデンティフィケーションを意識している。欧州連合は第二次世界大戦直後に始まり、今は経済的統合を推進し、より遅れてはいるが政治的統合も進めつつある。軍事的統合は欧州防衛共同体構想として検討されたが、この条約が発効するにはいたらなかった。

リアリストにとって国家は主要な、というより唯一の国際政治分析単位である。軍を管理するのは国家の責任だからである。リアリストは、国家は正当な武力行使の独占権をもつ実体である、というマックス・ウェー

バーの定義を奉じている。リアリストの描く国際的無政府状態という危険な世界では、軍事力だけが国家が自衛し、世界の舞台で意味のある行動をとる手段である。¹⁵ 欧州の軍事統合は検討されたが、いずれにせよ進んではない。

アラン・ミルワードは、諸国家をそのような統合プロセスに参加しようとする気にさせた要因を検証し、欧州石炭鉄鋼共同体（ECS）創設は、フランスの引き続き経済回復を確実にすることにより国益を満たすというフランスの願望の表れであると強調している。¹⁶ ミルワードは、国益に焦点を当てることによって、ヨーロッパ統合は国民国家が必要としたときに起こり、トランスナショナルな組織は特定の目的のために設立されたのであり、国民国家の影を薄くする手段として設立されたのではない、と主張した。¹⁷

しかし同時に、EU組織は、ヨーロッパ統合を背景に、相当な推進力を提供してきた。とりわけ政策執行機関である欧州委員会、諸条約の解釈・適用について一切の司法問題を取り扱う最高司法機関である欧州司法裁判所などはそうであるといえる。最後には、トランスナショナルリズムと、個々の政府の政策決定能力との間の対立が、ヨーロッパ統合過程の中心的課題であることに変わりはない。¹⁸

多くの分析家は、文化的なトランスナショナルリズムが世界の調和を増進すると信じている。文化間の相互理解により、国内、国際紛争を拡大させるステレオタイプ、猜疑心、恐れ、その他の対立的要因が減っている。しかし別の分析家は、我々は共通の文化に進んでいるのではなく、人々がいくつかの互いに敵対しあう文化あるいは文明にアイデンティティを見出し、帰属する未来に向かっていると考えている。これは、サミュエル・ハンティントンの理論のような文化的トランスナショナルリズムが、文明の衝突につながるという見方である。¹⁹ ハンティントンは、ナシヨナリズムが弱まり、そのギャップを埋める形で新しい文化的アイデンティティが生

まれ、諸国は「七つないしは八つの文化的ブロック」に帰属するようになると唱えた。その文化ブロックは、「西洋、儒教、日本、イスラム、ヒンズー、スラブ系オーソドックス、ラテンアメリカ、おそらくアフリカ」である。ハンティントンはこれらの文化ブロックが「対立の根本的な源泉」になり、「異なる文明が長期にわたる暴力的対立を続ける」ようになると予測した。学者の中にはこの理論を拒否しているが、ハンティントンの予測を完全には否定できないような、キリスト教的西洋とイスラムの対立が起こっている。

宗教は殆どの場合、強いトランスナショナリズム的要素を備えている。一部の宗教は普遍的な主張を掲げている。また一部の宗教は国境を越えて信者が一つにまとまろうとする願望を生み出している。宗教的アイデンティティと政治的アイデンティティが結びつく時、宗教信者は多くの政治的行動に出る。一つは自分の国の法律と外交政策をその宗教の価値観に一致させようとすることである。第二は、他国の同じ宗教の信者の目的に政治的支援を与えることである。宗教のトランスナショナリズム性は、アルカイダ指導者ウサマ・ビンラディンがサウジアラビア人でありながら、欧米、エジプト、パキスタンなどのイスラム教徒をアルカイダにリクルートできてきたことにも表れている。

宗教は世界政治において、肯定的、否定的両方の面で多くの役割を果たしてきた。多くの場合、平和、正義、人道的課題を促進する力になってきた。しかし、宗教がこれまで多くの血みどろの戦い、紛争、その他の政治的暴力の要因になってきたことも事実であり、この事実は今後も続くであろう。²⁰

宗教はまた、国内での対立紛争を引き起こし、悪化させてきた。さらに世界の多くの地域において宗教的な原理主義、過激主義の台頭が懸念を引き起こしている。世界政治における宗教の役割の例として、イスラム教がトランスナショナル宗教として世界的影響力を持つてきたことが挙げられる。イスラム教徒の非イスラム世

界への態度はいくつかの歴史的要素により形成されている。一つは、イスラム教の出發において平和的改宗と暴力的征服によってイスラム教が急速に拡大したという「勝利的起源」、二つ目は、キリスト教諸国、とくに欧州のキリスト教諸国との対立、三つ目は、欧州の様々な国によりイスラム教圏の一部が支配されてきたという過去である。

近代における国際関係の重要な傾向は、グローバルな問題に関係するトランスナショナル運動、トランスナショナル組織の増大である。この中には、トランスナショナルな女性運動とそれに関連した団体が含まれる。トランスナショナルな女性運動は、類似した哲学、目標を掲げている。その目標は、世界中の女性が協力し合つて、国際的レベルを含むあらゆるレベルにおいて、男女間の平等を促進し、政治についての考え方、政治のやり方を変化させることである。

フェミニストの女性、男女平等を支持する男性は、多くのプロジェクトを手懸け、進歩を達成している。一九九五年九月到北京で開催された第四回女性に関する世界会議とそれに続く二〇〇〇年六月にニューヨークで開催された北京+五会議は、その分野における活動の例である。

五 終わりにあたり

トランスナショナルな変化は確実に起こってきたが、それに対する抵抗もある。皮肉にもグローバリゼーションは、グローバリゼーションのプロセスが破壊的だと信じるトランスナショナルリストによる反グローバリゼーション運動に拍車をかけることにもなった。²¹⁾さらにこの場合、トランスナリズムに対する悲惨なイメ

ージによって、文化的境界線で分断された、衝突している世界が想起されることになる。リアリストはトランスナショナリズムをこのように考えがちで、その多くは、敵意に満ちたトランスナショナルな境界調整の危機に対する防波堤としてのネーション・ステート（国民国家）を強調するだろう。

多元論の最大の貢献は、相互依存を緻密に作り上げたことにある。多元主義者は「システムの一部の変化が、システムの残りの部分に直接的ないし間接的影響を及ぼす」相互連結性の高まりを、資本主義の拡大とグローバル文化の出現のためとした⁽²²⁾。それはまた、国家指導者の心に強固に確立した完全な国家自立という概念が、相互依存によって制限されはじめることにもなった。そうした展開が、協調の可能性を促進するだけでなく、国家の脆弱性のレベルも引き上げるようになった⁽²³⁾。

トランスナショナルな活動主体と国家の関係は複雑である。世界政治という行為において国境、ひいては国家権力など重要でない世界的な市民社会を築くために有望な礎であると自負する人々は、一方では、国家に代わる価値や忠誠心の供給源となることで国家権力に挑む。その一方で、国家権力を制限することによって、グローバル・ガバナンスという仕事を一層厄介なものにしているかもしれない。世界政府、中央政府といったグローバル・ガバメント（政府）が実現不可能であるとしても、グローバルな秩序をめぐるダイナミズムをとらえ、グローバルな統治をめざすグローバル・ガバナンスの中枢にある問題は、破壊的力を持つグローバルな勢力を抑えるだけの力が国家権力にないことだ、と評論家は論じている⁽²⁴⁾。トランスナショナルな活動主体は「ソフト・ガバナンス、すなわち道徳的説得、世論や消費者パワーの動員を供給することはできる。人々の苦しみを軽減することもできるだろう。…しかし市場を適切に調整し、金融システムに流動性を与え、市場に異変が生じたときはそれを正す、というようなことはできない」⁽²⁵⁾。

トランスナショナルイズムがこの先どこまで進歩するかを予言するのは不可能である。今後一世紀の間に人類が共通の文化、そして共通の政府までも共有するとは考えられなくもない。しかし、確実からは程遠い。今日の超文化主義への潮流が将来も続くことに疑念を呈する人々もいる。例えば、非英語圏の人々のアクセスが増すにしたがって、英語がインターネット上の共通言語でなくなるだろうと考えるアナリストもいる。「WEBの現状を目ざとく観察して、将来に当てはめようとするのには注意を要する」とある識者は賢明にも喚起を促している。⁽²⁶⁾

さらに、ナショナルイズムがグローバルゼーションやトランスナショナルイズム運動に対する非常に弾力性のある、回復力に富む障害であることは証明されつつある。例えば、EUと連動して、ヨーロッパ諸国民の間にトランスナショナルなアイデンティティが芽生えたのはある程度事実である。しかし、その新たな政治的アイデンティティを有する人々は依然少数派で、自分たちの伝統的忠誠心を国民国家に据えているヨーロッパ諸国民のパーセンテージに飲み込まれてしまっている。⁽²⁷⁾この動向は、少なからずヨーロッパの実情を示している。ナショナルイズムは強力で粘り強い力であり、人々の政治的アイデンティフィケーションを依然として支配し続けている。

注

- (1) David Conway, *In Defense of the Realm: The Place of Nations in Classical Liberalism*, Ashgate, 2004; Robert H. Wiebe, *Who We Are: A History of Popular Nationalism*, Princeton University Press, 2012.
- (2) W. Raymond Duncan, Barbara Jancaj-Webster and Bob Switky, *World Politics in the 21st Century*, 2nd ed., Pearson

- Longman, 2004, pp.320-321.
- (3) John Baylis, Steve Smith and Patricia Owens, *The Globalization of World Politics*. Oxford University Press, 4th ed., 2008, p.8.
 - (4) Alasdair Blair and Steven Curtis, *International Politics: An Introductory Guide*. Edinburgh University Press, 2009, p.207.
 - (5) Anthony Giddens, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press, 1990, p.21.
 - (6) Robert Gilpin, *Global Political Economy: Understanding the International Economic Order*. Princeton University Press, 2001, p.364.
 - (7) Jan A. Scholte, *Globalization: A Critical Introduction*. Macmillan, 2000, p.46.
 - (8) David Harvey, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Blackwell, 1989.
 - (9) Michael T. Klare and Yogesh Chandrani, eds., *World Security: Challenges for a New Century*, 3rd ed., St. Martin's, 1998, p.vii.
 - (10) Hans Peter Schmitz, Domestic and Transnational Perspectives on Democratization, in *International Studies Review*, Vol.6, Issue 3, 2004, pp.403-426.
 - (11) Gon Nankung, *Japanese Images of the United States and Other Nations: A Comparative Study of Public Opinion and Foreign Policy* (Doctoral dissertation), University of Connecticut, 1998, p.46.
 - (12) James Der Derian, Introducing Philosophical Traditions in International Relations, in *Millennium*, Vol.17, No.2, 1988, p.191.
 - (13) Robert Keohane and Joseph Nye, eds., *Transnational Relations and World Politics*. Harvard University Press, 1972.

- (14) Baylis, Smith and Owens, *op. cit.*, p.115.
- (15) Blair and Curtis, *op. cit.*, p.151.
- (16) Alan S. Milward, *The Reconstruction of Western Europe, 1945-51*, Routledge, 1984.
- (17) Alan S. Milward, *The European Rescue of the Nation State*, Routledge, 1994.
- (18) Blair and Curtis, *op. cit.*, p.290.
- (19) Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, 1996. (編者注「文明の衝突」集英社、一九九八年)。
- (20) Jonathan Fox, 'The Rise of Religious Nationalism and Conflict: Ethnic Conflict and Revolutionary Wars, 1945-2001', in *Journal of Peace Research*, Vol.41, No.6, 2004, pp.715-731.
- (21) Kate O'Neill, 'Transnational Protest: States, Circuses, and Conflict at the Frontline of Global Politics', in *International Studies Review*, Vol.6, Issue 2, 2004, pp.233-252.
- (22) R. Little, 'The Growing Relevance of Pluralism?', in S. Smith, K. Booth and M. Zaleski, eds., *International Theory: Positivism and Beyond*, Cambridge University Press, 1996, p.77.
- (23) Baylis, Smith and Owens, *op. cit.*, pp.114-115.
- (24) Glenn P. Hastedt and Kay M. Knickrehm, *International Politics in a Changing World*, Longman, 2003, p.113.
- (25) Sherle R. Schwenninger, 'NGOing Global: Can Civil Society on International Scale Compensate for the Anarchy of World Affairs?', in *Civilization*, Vol.7, No.1, 2000, pp.40-42.
- (26) Computer Speak: World, Wide, Web: 3 English Words, in *The New York Times*, April 14, 1996.
- (27) John T. Rourke, *International Politics on the World Stage*, 11th ed., McGraw-Hill, 2007, p.161.